西東京市市民協働推進センターゆめこらぼ『ゆめこらぼ通信』第12号、2011年4月1日より

① 「協働」 多くの事例から考えた

市民と行政職員、シンポで

「協働を考えるシンポジウム」は2月9日(水)、市役所保谷庁舎で開かれ、行政と市民活動団体などとの協働に関心のある市民 16 人と近隣市を含む行政職員 15 人の計 31 人が参加しました。

第1部では、NPO法人笑顔せたがや事務局長で、松戸市の「協働のまちづくり協議会」会長も務める山崎富一さんが、「市民とともに、協働のまちづくりを」と題して基調講演＝写真。多様化する市民ニーズや複雑化する地域課題への対応などが、協働が今日求められている背景だと指摘したうえで、松戸市や世田谷区での先進的な事例を紹介しました。

第2部のパネルディスカッションでは、市民活動センターたちかわの小林郁義さん、神奈川県大和市の山本春美さん、市内のNPO法人生活企画ジェフリーの渡辺美恵さん、西東京市協働コミュニティ課長の浜名幹男さんの4人が登壇。それぞれの立場から協働の取り組みを紹介しながら、思いを熱く語りました。コーディネーターの山崎さはパネリストの方々に的確な質問を投げかけ、より深いコメントを引き出していました。

なお、基調講演やパネリストの発言内容など詳しく知りたい方は、ホームページに「協働を考えるシンポジウム報告書」が近々公開されますので、ぜひご覧ください。

家族からダメ出し/厳しい合評会/望外の全編掲載

② NPO代表が明かす「女性の聞き書き集」ウラ話

本年度最後のトークサロンは 3 月 10 日（木）、6 人が参加し、『西東京市の女性の聞き書き集』を発行したNPO法人生活企画ジェフリー理事長、渡辺美恵さんから編さんにまつわるこぼれ話を聞きました。

聞き書き集は昭和を生きた 22 人を取り上げていますが、本人は了承したのに家族が難色を示したため取材を断念しなければならない人が何人もいたそうです。インタビューは1回2時間ですが、補足取材で何回も足を運んだり、原稿も本人が読んで「よい」と言うまで書き直したり。フリー編集者でもある渡辺さんは「必殺原稿仕分け人」と呼ばれ、仲間同士の合評会ではみんな目の色が変わり「険悪の一歩手前」の空気だったそう。

東伏見に 30 年余り住んでいた詩人の故茨木のり子さんの作品「自分の感受性くらい」は、遺族が無償で全編掲載を申し出てくれ、編集スタッフを感激させました。

渡辺さんたちは4月に西東京市女性史研究会を立ち上げ、今回の本とは一味違う、読み物としての記録を残していきたいと張り切っています。

写真提供/中川航一

■ “think global act local” の信条をもって「協働をテーマとする」2つの会に参加しました。

■NPO と行政との協働を、組織的にいかに有効に進めるか（think）を話し合ったのが上の記事。

■具体的な事業で市民・NPO と行政・職員同士が互いの専門性を出し合い協働したのが『西東京市の女性の聞き書き集』（左記事）。この活動(act)はわが町（local）を誇れる女性パワーを生み出したと自負しています。